

土成中学校学校 「学力向上実行プラン」

研究テーマ

志の実現に向けともに歩む生徒の育成
～折れない心の育成を通して～

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員 三橋和博 河野恵子	委員 校長:尾関英知 教頭:植原浩之 教務主任:宮井宏 1年主任:河野昌紀 2年主任:小崎朱代 3年主任:三橋和博 人権教育主事、生徒指導主事、道徳教育推進教師、研修主任、保健主事 特別支援教育コーディネーター 学力向上学年担当:河野恵子(1年)、小崎朱代(2年)、三橋和博(3年)
	校長 尾関 英知

(1)基礎的・基本的な知識・技能の習得

児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 漢字の読み書き、計算などの基礎的な事柄については、意欲的な取り組みが見られ、ある程度の定着が見られる。	①読書習慣が身についている。 ②言語に対する関心・理解を深め、言語に関する基礎的・基本的な知識や技能を身につけることができる。	①「読書の習慣が身についている」と答える生徒が60%以上を目指す。 ②県調査の国語「書くこと・読むこと」の項目が県平均以上を目指す。	・読書習慣が身に付くように、学級文庫を充実させたり、お昼の校内放送を利用し本の紹介をさせたりする。	①学級文庫を充実させ、昼の校内放送を利用し、本の紹介をするなどして読書活動を促した。 ②授業の中で、小テストを継続的に行った。 ③生活記録の指導を通して、言語意識を高めた。	①「読書習慣が身に付いている」と答えた生徒の割合が65%と目標以上を達成することができた。 ②授業の中で、小テスト等を継続的に行うことにより、知識について向上が見られた。 ③生活記録の提出率は、目標の80%を超え、約90%を達成することができた。
課題 学力に二極化が見られる。学力の低い生徒は、文章を読み取る力が弱く、書くことが苦手で、学習意欲の低下につながっていると考えられる。	具体的方策(教員の取組) ①学級文庫の充実、朝の読書の時間の確保により、読書活動を促す。 ②小テスト等を継続的に実施する。 ③生活記録の指導を通して、言語力の向上を図る。	取組指標 ①一日平均15分以上の読書を目指す。 ②授業の中で、週1回以上小テストなどを実施する。 ③生活記録提出率80%以上を目指す。		評価 B 言語事項については、課題が見られた。次年度でも、小テスト等や生活記録を通して、言語事項の定着を図る。その上に、言語事項の活用を通して、言語事項を身に付ける必要性を実感させていきたい。	次年度における改善事項

(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 自分の考えを相手に分かりやすく伝えようと手段や方法を工夫しようとする意欲がある。	目的に応じて、根拠や理由を明らかにしながら、自分の考えを表現することができる。	①県調査国語「話す・聞く能力」において県平均以上を目指す。 ②県調査の数学「数学的な見方や考え方」において、県平均以上を目指す。	・ペア学習・班学習の機会を増やす。 ・5つの言語意識に焦点を当てた授業展開を行う。	①ペア学習や班学習の機会を増やすことにより、自分の考えを筋道を立てて発表する機会を1週間に1回以上は設けることができた。 ②各学年、研究授業を1回以上実施することにより、教師の学び合いの意識も高まった。	①県学力調査の結果より、「話す・聞く能力」において県平均以上を達成することができた。それだけでなく、「書く能力」を大きく伸ばすことができた。 ②県学力調査の結果より、数学の「活用」において、県平均以上を達成することができた。全ての学年において、「数学的な見方や考え方」を大きく伸ばすことができた。
課題 自分の考えや思いを筋道を立てて表現することに課題がある。	具体的方策(教員の取組) ①学習活動の中で自分の考えを筋道を立てて説明したり、文章に書く・表現する機会を意図的に設ける。 ②学び合い活動を取り入れた授業を実施する。	取組指標 ①自分の考えを筋道立てて発表する機会を1週間に1回以上設ける。 ②各学年、研究授業を1回以上実施し、授業に生かす。		評価 A 表現力においては改善できたと考える。次の段階として論理的思考能力が上げられる。次年度は、この課題について取り組む段階にきていると考えられる。	次年度における改善事項

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 落ち着いた学習に取り組むことができるようになってきている。学習に対して、しっかり取り組まなくてはならないことを理解している生徒は多い。	自ら課題に自ら気づき、自ら主体的に取り組むことができる。	①「家庭学習の習慣が身についている」と答える生徒の割合が80%以上を目指す。 ②「自ら進んで課題を見つけ、それに積極的に取り組むことができる」に対して肯定的に答える生徒が80%以上を目指す。	・「志成ノート」や「心にキボウを」のテキストの使用方法を工夫する。	①「志成ノート」によって自らの活動を振り返らせる活動に取り組ませることができた。 ②「心にキボウを」のテキストを活用し、家庭学習の大切さを理解させ、自主勉強を毎日提出できるように働きかけた。	①全ての学年において「志成ノート」を活用することができた。1年生においては道徳教育との関連から、2年生においては学級活動との関連から、3年生においてはレジリエンス教育との関連から「志成ノート」を発展させることができた。 ②自主勉強を毎日提出できている生徒の割合が90%を超えている。
課題 難しいことや苦手なことでも最後まであきらめない気持ちや、疑問に思ったことについて追求しようとする意欲が乏しい。	具体的方策(教員の取組) ①「志成ノート」を点検しアドバイスすることにより、折れない心や探求心を育成する。 ②自主勉強が毎日提出できるよう粘り強く指導し、家庭学習の習慣化を図る。	取組指標 ①「志成ノート」によって自らの活動を振り返らせる。 ②自主勉強を毎日提出できる生徒の割合が80%以上を目指す。		評価 A 「志成ノート」を学年ごとに教師の学び合いから、さらに発展させることができた。次年度は、1、2、3年生と縦のつながりを意識して「志成ノート」の改善に取り組む段階であると考えられる。	次年度における改善事項

平成29年度 学力向上ロードマップ

